



オペラ・サウダージ、恩寵の渚で ——今福龍太先生への手紙

阪本 佳郎

稀に稀れ 汝きや拝で
今汝きや拝むば にや何時頃拝むかい
いもしゃん人ど 真実あらな
石原 踏みきち
いもしゃん人ど 真実あらな
拝まらん人ど 拝で知りゆり
神ぬ引き合わせに 拝まらん人ど 拝で知りゆり

汝きやが先々 果報がなくとう あらしたばれ

先生と明子さんが、旅への誘いに掛け合いで歌ってくださった朝花節——。人々との出逢いと縁を言祝ぎ、各々の生への労いの情まで凝らされて、私たちを迎えてくださった歓待の歌に、心の芯から聴き入っておりました。感じたのは、いらしたすべての方々が、先生と魂の共振を持っており、またそれをあの場に携え、持ち寄っていたのだということ。あのウタブリの愛しい波^{かな}にあてられて、精神^{こころ}を揺り動かされないものはいない。集った皆が、先生によって蒔かれた種石が今にまで立てる記憶の波紋を、それぞれに遡っていたの

ではないでしょうか。オペラ・サウダージは、今福龍太という「世界」の、万華鏡か玉手箱のような多面・凝集体。その世界と、私たち観客の心沸き立つ交感の波動も、舞台の一部を為していたのだと思います。私もオペラが目眩く幕を移し変えていくごとに、「ここではないどこか」へ、先生にいただいたいくつもの始まりの時へと、あの場にながらにして旅していたのです。あの詩と歌の祝宴は、私たち一人毎に異なる、かつての旅の反芻であり、新たな旅への扉でもあったのでしょう。ささやかにすぎますが、ここに一つのオマージュとして、私の心うちに影絵のように明滅した、先生に導かれた旅の、島々の光景について、お伝えしたいと思います。



スーザン・ソntag。この稀代の闘争的思想家について、あの日、添えられた言葉はほとんどありませんでした。先生の本学への着任とソntagの死が、偶然に時を重ねたことを告げた後、「ソntagはボスニア内戦のさなか、銃弾飛び交うサラエヴォの街で、勇敢にも演劇公演を行ったことがあった…」とだけキャプションが打たれる。そして、『サラエヴォにてゴドーを待ちながら』の彼女の姿を映したごく短い映像…。ソntagに直接関わる部分はこれだけでした。ことさらに言葉を費やすのではない、どこか溜めを張った雄弁な沈黙がオペラの開演に滲んでいました。その美学が逆説的に、彼女より受けとったものの重みを、先生がこの学舎へと持ち込んだラディカルな意志の滾りを、つよく物語っていたのだと思います。「状況」・「歴史」への詩学的介入。戦争に示現される直接的暴力に包囲された絶望のサラエヴォにおいて「待つ」こと。希求すること。そのゼロ地点から、あらゆる「日常」が剥奪されつつある私たちの現在の閉塞的な生にまで想い致すこと。高度必需たる「詩」を、本来のものとして日常に吹き込みなおし、生を、そして死を生きさせようとする詩学^{クンスト}。ソntagがサラエヴォや9.11直後のアメリカで問おうとしたそれを、先生は、大学という場において確かに貫き通そうとしておられました。

オペラを観ている時々に、私は思い出していました。監獄をふと連想しもしってしまうつくりの研究講義棟にあって、ひととき光彩を放っていたあの部屋の扉を。珊瑚たちが表札のまわりを漣に濡れながら嬉しそうに彩り^{あし}、“遊び”の世界へと「オイデおいで」しているその扉を開けば、そこはもう、奄美、ブラジル、ハワイ、アラン群島——、無数の土地と書物の世界へ、心沸き立つ知の探究が待っている。

3.11から一年の後、先生のゼミへと参加した私たちは、コトバがその根から津波に浚われてしまった、更地のような精神において、新たにそれを紡ぐことが如何なることを学ぶことを望み、あの部屋に集っていました。9.11以後の世界へ向けての高潔な応答の書であり、もっとも先鋭な歴史哲学書たる『ミニマ・グラシア』を、あえて3.11以後の導きの書として。9.11以後の、明暗のはっきりと分かれた原理主義的世界認識において、こぼれ落ちる繊細な「現実」たち——、皮相な政治言説にコトバが目減りしていく状況に抗して、歴史の半影に朧ろな^{コロナ}燐光を発する語られざる記憶の痕跡を、小さな“恩寵”として掬いとる。そうして織られたテキストを手がかりに、私たちは、先生を渦の中心に

車座になり、各々のあの部屋に集うまでの道のり・記憶を親密に交差させ、「生きられた言葉」について想いをもち寄ったのです。先生がああ集いにてお教えくださったことを、このさらなる危急の現代において、改めておもいます。

いまや世俗的な生の理念は因果律の法則によって呪縛されて未知の膂力を失った・・・、この生活世界に顕現する小さな恩寵、極小の優雅さの探求は、思想の真の自由を死守するために火急の意味をもっている。日々の偶景のなかであられる優雅さは、自明の属性としてなにもものかに無条件に備わっている美質でもない。それらは不意に、偶然の出来事のようにして与えられるものでありながら、それはある種の求めに応じてしか出現しないものである。その求めとは、私たち自身がそれを欲望として意識しないほどに、深い無意識のなかに呼びかけられた強い希求である。意思という自覚的な心のはたらきがもはや制御できなくなる臨界においてはじめて作動しはじめる寡黙な声による希求である。

(『ミニマ・グラシア』290頁)

先生のもとでの、*grace*「恩寵」・「優雅さ」への探求の道は、何らかの答えを措定して、それに随意的に向かっていくものでは、もちろんありませんでした。私たちの意識にすら上らない、時そのもののもつ希求に応え、偶然に向こうからたち現れるコトバへと応じること。その道そのものが、私たちの生を生きせしめる膂力に他ならない。そう先生は教えてくださったように思います。吟遊詩人とは、そのコトバをウタに昇華して衆生へと贈る紐帯者。オペラ・サウダージも、先生ご自身の吟遊詩人への転生の道行きに訪われた“恩寵”の集合体のようでした。私たちは、先生とともにあることで、ただひたすらに恩寵へと導かれる種を、贈与されてきたのです。



先生の語りで紡がれるブラジル、バイーアのお話——。カルナヴァルの祝祭と喧騒の裏路地に滲む、官能と恐れのお闇。踵を返して現世へと戻ろうにも、ほんとうの深淵を覗かずして、去ることはできない。闇に魅入られて、時に人は、蟻地獄の砂穴に吞まれるように、その磁場から逃れることができないのです。跳いても渦の流れへと戻されてしまい、最後には闇に貪られる。吟遊詩人は、そうして四肢分断の憂き目にあう宿業をもつものかもしれません。しかしそれは、必ずしも単なる惨たらしい終末ではなく、愛が死に出逢う究極的絶頂に近いものでもあるのでしょうか。オルフェウスの分断された四肢のあはひに空いた真空のお闇は、世界の仮象を暴きつつ、真実にナイフを突きつける。

この世は危険に満ちている
熱情を持った者にとっては
とりわけ危ないのは月がとつぜん顔を出し、
忘れられたように空にとどまったとき

月明りが狂ったように輝き
あらゆる音楽がひとつになる
そんなときは気をつけよ
なぜならきっと近くを一人の女が歩いているから

音楽と月と情熱でできた
一人の女が近くを歩いている
あまりにも完全な女 この世には不釣り合いなほどの
その女は月そのもののようだ
美しすぎて苦しみだけを映し出す
恥じらいに満ちて真裸の姿をさらす

バーデン・パウエルが弾くギターの調べに乗せて、ヴィニシウスの「コンセイサンウのオルフェウ」が聴こえてくる。ゼミ卒業生のヴォーカリスト大山もも代さんが演じる、彼岸に堕ちたエウリーデイスの清明な声、四年ゼミ生高橋由佳さんによる清楚な舞いとペキの実でできたインディオのショカーリオの艶かしいザラザラという摩擦音が場を満たす。オルフェよ、冥府という世界のうらより衍する最愛のひとの歌に、耳を澄ませ――。

サンパウロの裏路地や、リオのファベラを思い描くなら順当なのかもしれません。でも、私の想いは、奄美へと向かっていました。奄美自由大学にてお連れいただいた、あの夕暮れ時の静寂に佇む、加計呂麻島は押角の集落。せせらぎの冥い闇の袖に、輪郭も定かならず、珊瑚や宝貝が敷き並べられている塀が続いている。その脇を抜けたところにある波打ち際に立ち、皆で没陽を見送ったとき、背後には大きな満月が登っていた。あの日は、大潮にあたり、大海は岩壁へと膨んでのし上がり、しきりに身を擦り振らせていました。島尾中尉は、岬の先にある呑ノ浦から、いつおとずれるとも知れぬ死を待つ震洋の洞穴を抜け出、珊瑚や貝たちに傷つく足を波間に踏みしめ、月夜の干瀬を渡っていった。そして闇に朧に浮かぶ、振り返って見てはならぬ神女の面影を、まじまじと見続けてしまったのではないのでしょうか。一度うらへと渡ってしまえば、あるのは、暗闇に寄せては返す波音のリトルネッロ。そこでは、引き返すことのできない、愛しき逢瀬が待っている。

「声」が耳について離れません。先生は、オルフェは耳の人と、おっしゃいました。眼にうつる万象が幻影だとしても、声さえ耳からしみ入れば、私たちは心の中の秘密の部屋で、世界をひっそりと抱きしめることができる。「声」、cohée = 入江、浦。海とシマの間に入りくむ耳奥の襞。うらでは、私一個人の心など、意識など、滲み消ゆ。魂は一つの夜と化す。その闇と接するような境涯に衍するあの精神の震え。吟遊詩人は、それを何よりも確かな実在として、歌にして言祝ぐのでしょうか。

井の頭の泉の畔には、使われなくなった灯台のような一棟の白いビルがあります。その天辺にある秘密の一室で、自由音楽の灯台守をしているような賢翁がいらっしやって、先

生といつも耳のお話をされていましたね。彼は、耳は、一般に認識されているような受容器官などでは決してない、とおっしゃっていました。耳管からはゴーと渦巻く風が吹き出し、耳骨からはたえず漣波が発せられている。私たちは、意識せずして風や波を交わしあっているんだ。互いに震えて、引き寄せては還しているんだ、と。

耳のなかの蝸牛が唸りをあげて、しきりに歌っている。おとなみは字義どおりに音の震えとしてあり、あるいは音擦れとして緊張をともなった二者の持続的接触でもあり、そして音ズレともいうように、絶えず飛躍をともなってやってくる。ほら、この耳にも…。

鮮やかなるかな朝鮮、オルペウス

鮮やかなるかな朝鮮、オルペウス

鮮やかなるかな朝鮮、オルペウス

時と土地との交差するマ（間、魔、真…）において、「声」が響き渡る。耳管の渦が大きく巻いて広がり、奄美から済州島へとたなびくカルマン渦列を為して、歴史の闇を弄ろうとする。済州島、フィリピン、ヤポネシアの房飾りは、その“ふるえ”を伝って、轟しく猛り進む歴史のタイタンから大海へ投げ出されてしまった溺死者たちの記憶を、縫い合わせていきました。先生が想いを凝らされた吟遊詩人の一人、ミルトン・ナシメントの“Travessia”（ゼミ卒業生の一人、ピアニストの内藤晃さんが舞台上で見事な編曲によるピアノ演奏を聴かせてくれました）——。中間航路の海底に飫する半田付けされた黒人奴隷たちの骨の墓標、極限の痛苦に苦しむ呻き声。それを慰撫するように吹くやわらかな“向かい風”が、今日新たな世界を希求して船を駆る旅人の頬を撫でる。その風は、あの空の、澄み切った透明な気圏へ舞い上がり、歌っています。惑星のそこかしこへ関係性の渦を運ぶ、大循環の風。吟遊詩人たちは、その気流のささやかなニュアンスの一つ一つを受け取り、痛苦も快樂も、歓喜も悲哀をも、ひとしなみに物語歌にして、歴史を詩の混血体として更新します。

鮮新世の渚にて打ち寄せられた岩塊が、今日われわれの路傍の石となり、幾星霜の時をくぐった声を呟いている。先生の耳は、こうした事物に秘められた時の声にも傾けられていました。加計呂麻島の南方にある伊子茂浜は、鉤型に折れた小半島に縁取られた内湾にあり、訪れた者は、常風の、しんと美しい静けさに心奪われます。生命が初めて海から陸へとあがった始原の渚があるとすれば、このようなところだったのではないか…。お連れいただいた時、珊瑚のかけらや宝貝を拾っては、それを波間に投じながら汀を歩き、感慨に打たれていました。そこには私たちの「個」がもつ生の気配など微塵もなかった。もっと大きな世界生命そのものの意志が遍在するような、生と死の循環が永遠の時をかけてそこに揺蕩い、歴史の一姿として今に顕れているような、恩寵の感覚に充ち満ちていました。「人間中心主義的な価値観に流れてゆく危険性を持つヒューマニズムを超えたところに、真の智慧と愛の大地は存在していた」、と宮沢賢治を引きながら先生はおっしゃいました。今、ただ人間だけが助かろうと（それも本当のところどうなのかわかりません）、ミンクや鶏などの動物たちが「媒介者」としてのみ断じられ、数千万匹も大虐殺の憂き目にあっている。「殺処分」という無味乾燥というには過ぎて不気味な言葉で、その悍ましさも去

勢されてしまう。私たちの身体は、精神は、危機にあるように思います。先生は、カフカの描く流刑地の、あの処刑機械の暗喩の力を常々呼び出しておられました。今、人は、あの処刑台に据え付けられる危機にある、というよりもむしろ、何の意識もなく処刑宣告を体に刻みつけ死に至らしめる精神なき機械の方へと、心も姿も、ますます造り変えられてしまっていることに慄然とします。霊的交感の回路たるわれらが耳は塞がれて、この惑星に棲むあらゆる他者とともに分かち合ってきた、はるかな気圏の詩学は失われていく。省みられぬ尊き命の怨の海は、ひと知れず、ひたと波寄せ、私たちの足もとを浚っていくでしょう。世界の根源である、「万物の連鎖、インドラの網への祈りにこそ救いのヴィジョンがある」、と先生が書かれていることが、この時代において喫緊のこととなっているように思います。

永久におまへたちは地を這ふがいい。
さあ、海と陰湿の夜のそらとの鬼神たち
私は試みを受けよう。

(宮澤賢治「宗谷挽歌」。引用は今福龍太『宮澤賢治 デクノボーの叡智』265 頁より)



ヘンリー・デイヴィッド・ソローの獄中での一夜。ソローは、奴隷制の濫用とメキシコへの侵略戦争にひた走る合衆国政府への反抗の意志を示すために税金の支払いを拒否して投獄されました。ゼミ卒業生、仲野孝比古さん、神宮一樹さん、大山もも代さんの共演による、その一夜を舞台にした演劇作品。私たちを取り囲む社会の牢獄とは、まず何よりもその言語であることを、作品は巧妙に描き出していたと思います。ソローから徴税しようと尋問を繰り返す役人は、ソローの精神を、あのでこので社会の通俗的な枠組みに嵌め込もうとします。しかし、ソローは、そうした言語に嵌め込まれることなく、あまりに自然にソローであることを貫き通すことができるのです。彼は社会にあらうが牢獄にあらうが、より高次の精神の圏域たる自然に生きていました。その“自然”から発される言葉の高潔さは、あの劇でソローを演じられた先生そのもののあり方であることに、観ていた私たちは想い致さずにいられなかったと思います。この世の理の深みに触れつつ、ソロー＝先生の言葉には常に笑みを運ぶ軽やかさがありました。自然とはそれそのものにおいて諾われるべき、オプティミズムとともにあるもの。「通俗的な感情を排し、浅はかなヒューマニズムを超えて、森や大地とともに生命への賛歌を送りつづけ、人々を鼓舞しつづける不動の、静謐な、天球の音楽」。俗事因果に拘った世間を、豆畑を抜け出ていくように後にして森へと分入り、静謐において奏でられる真理の音楽に耳を澄ませること。それが取り戻されるべきもつともラディカルな反抗政治の立脚点であると、私たちはソロー＝先生に連れられて、奄美群島や祖谷、津軽や京都北山などの幽冥の地を歩きまわったのです。

「川は山から流れ下る」と教えられても、それは想像上の知識でしかない。真の意味で学

知を持つ者は、自らの繊細な身体感覚をつうじて自然をすみずみまで知るのだ。彼は誰よりも精確にものの匂いをかぎ、味わい、見、聞き、触れてみる。彼の経験はより深く純粋な経験となるだろう。私たちは推論や演繹によって学ぶのでもなく、哲学に数学を適用することで学ぶわけでもない。私たちが学ぶのは、直接的な交わりと共感によってである。

(ソロー「マサチューセッツ州の博物誌」。引用は今福龍太『ヘンリー・ソロー 野生の学舎』5-6頁より)

京都北山に、歩くことの恩寵を求めて、ご一緒して分け入った時のことを未だによく思い出します。ユリ道を軽快に抜けてゆき、時に九輪草の群落に足を止め、鬼羊歯を早々と掻き分けては、山の奥へと進んでゆく。滝壺の袂、龍の如くのぼり生える藤の木の傍には、モリアオガエルの精気に満ち白く濁った卵塊がぶら下がり、今かと生誕の時を待っている。私たちは樋ノ水谷という人知れぬ聖域に至り、そこに遍在する石と水の気配に歓喜していました。川は、チャートの巨岩で畳み掛けるように覆われており、その岩と岩の合間を抜けて先に進んでいきます。谷中の少しひらけた空閑地に、小さな、滝ともいえぬ程の落水^{おちみず}があり、私たちは、そのひととき清冽な水流に、掌を浸し、口を添えて、長時間の歩行に乾いた喉を潤しました。清水の、まじりつけの無い、自然そのもの純粋な美味に舌鼓をうつ。その喜びの水場で、先生が詠まれた、次のソローの言葉は、以来私が最も大切にしている一節です。

私は矢尻をも飲み込んだ。矢尻はすべての泉が湧き出すところから流れてきた。どれほど多くの卵を私は飲み込んだだろう？ 私のなかから、なにが生まれてくるのだろうか？ 川のなかには思考の種子が漂っていて、それは私の内部で枝葉を広げてゆくのだ。胃のなかの蛇は川のせせらぎを聴きつけては頭をもたげ、私の口元まで昇ってくる。

(ソロー「日記」1851年8月17日。引用は『ヘンリー・ソロー 野生の学舎』248-249頁より)

ネイティヴ・インディアンの矢尻は、ソローにとり、自然界における人と野生との関わりを教える、時を越えた贈りものでした。万物の連鎖、インドラの網のなかにある存在交感の理法を語り伝えてきたインディアンの叡智の象徴としての矢尻。それは、ソローの中で卵に、思考の種子に移身します。体内で卵は孵化し、蛇となって育つ。そして原郷たる自然の音楽、つまり川のせせらぎを聴きつけては、口元までのぼり還ってゆこうとする。その蛇は、ソローが自然からもらった思想であり、言葉なのだと思います。言葉も、人と自然の間を循環してゆく。先生は、このソローの言葉に、さらにつけくわえてくださいました。「川に棲む水蛇を呑み込むこと」。ソローの水蛇、つまり自然によって宿された彼の思想・言葉を、今度は、私たちも呑み込もうという決意。しかし、それはソローの言葉を、いわゆる“学習”しようというのでは、もちろん無いのでしょうか。あらかじめ知識として知られたものをなぞること、あるいは、未知を概知に変えることが学びではない。「世界」

から贈られてくる未知を、未知なるものとしたまま、呑み込むこと。それが体内でどのように変成し、大きくなってゆくかもわからない。しかし、因果律に縛られた意図や目的、短絡的な打算を越えて、いずれ自らを導く蛇となるそれを信じ、時に蛇のように蛇行していくのだとしても、それを「道」として引き受け、歩んでいくこと。それが先生の教えであつたと思っています。

先生の胃のなかにいる多頭の七色蛇は、世界に無数に散らばる群島の、^{クラゴー}暗洞に流れる^{をちみず}変若水のせせらぎを聴きつけては、ひっきりなしに喉元にのぼってきているものと想われます。私たち教え子それぞれの旅も、先生の水蛇と、世界のあちこちで不意に出遭つては、それを呑み込もうとすることの巡礼行——、そして先生の水蛇の名こそ *gracia* 「恩寵」であつたのではないのでしょうか。



ソntagの死と重なり始められた、先生の本学での学び舎は、ジョアン・ジルベルトの死とともに結びの時を迎えました。オペラ全体のエピローグとして上映された、先生がジョアンへと捧げた、音楽と映像とテキストの作品。私は、流れていく詩行を目で追いかけてながら、感涙の念を禁じえませんでした。そこに、ハワイに流れ着いたルーマニア亡命詩人シュテファン・バチウへのオマージュとして、以前先生が即興で読んでくださった詩文も忍ばせてくださったこと。バチウはわたしの博士論文の探究のテーマでした。そしていま、バチウも愛したジョアンの沈黙のサウダージが響く。このふたりの吟遊詩人は、失われた時に揺らめく永遠の詩の王国への郷愁を分かち合った、一個の唄者であつたのかも知れません。片やギターを爪弾いて、片やウクレレを風に遊ばせて。

きみのすべては詩だった
日々の詩だった
偉大な詩になどなろうとしない
ささやかな詩
つつましい道端の詩
蜉蝣の羽のように脆い詩
石のように動かない詩
風のように吹きすぎてゆく詩
ひそやかに澄んだ詩
攪拌すれば薄墨色に濁る詩
濁りながら透明さを願う詩
そう願いつづけることによって
自らの透明さを証す詩

倍音のように
あらゆる声に寄り添うことのできる声

他者の声の振幅を深めることのできる声
ともに歌いたくなる声
遊びたくなる声
ほほえみを誘いかける声
そしてそれは
最後には沈黙に還ろうとする声

「今日のすべては詩です」という言葉で始めてくださった、先生の「詩」と「声」へのやわらかなオマージュに、私には、その「今日」が、先生にお会いして学びを受けて後の今日にまで至る、毎日に思えてなりませんでした。オペラの冒頭、先生の四人の師についておっしゃられた「生涯の師は、いつどこで出会えるかわかりません。そんな師とめぐりあう偶然を、私はいつまでも信じつづけたいのです」という言葉を聞き、私たちは、私たちこそが、先生という師をもつ偶然の巡り合わせに恵まれ、先生の詩によって日々を言祝がれてきたことに、万感の想いでいます。

群島-世界を巡る海流は、ここでももちろん止まることなく、先生への呼びかけの声をますます高めていくように思います。奄美のシマ唄が、天下一の酒精に興に乗り、波音に応えながら三絃の音を高めていくように。そして「きょやほこらしや」という声が、毎夜どこからか響いてくる。奄美、ブラジル、メキシコ、ここではないどこか——、月琴の震えに唱和して遊ぶ、すべての吟遊詩人の渚から。

Nós naufrago!



台湾の月琴を弾きながら即興詩「ジェロニモの遺言」を吟遊詩人風に朗読する今福龍太。(写真: 濱田康作)



徳之島の闘牛場を背景にしたダンサー中村達哉による即興ダンス。これに合わせてガルシア・ロルカの詩が今福龍太によって朗読される。(写真：柴田祥子)



物語劇「ソローが獄で過ごした一夜」のシーン。仲野孝比古演ずる税吏官がソロー（今福龍太）に納税命令書を手渡す場面。(写真：兼田言子)



京都北山、樋ノ水谷清流に佇む『ヘンリー・ソーロー 野生の学舎』



作家赤坂真理とともに「触」(エクリプス)と「光冠」(コロナ)をテーマに歌い踊る。
(写真: 倉田めば)

今福龍太〈オペラ・サウダージ〉
人はいかにして民俗学者から吟遊詩人になるか

日時：2020年3月20日（金）

場所：東京外国語大学 プロメテウスホール

共演者：

赤坂真理 作家

大山もも代 ヴォイス・アーティスト

神宮一樹 舞台劇アクター

高橋由佳 ダンサー

立石奈穂 ウード奏者

内藤晃 ピアニスト

中村隆之 カリブ海文学思想研究者

中村達哉 ダンサー

仲野孝比古 エピグラマー・レック奏者 他

主催：今福龍太〈オペラ・サウダージ〉実行委員会

共催：東京外国語大学総合文化研究所／国際社会学部 現代世界論コース

